雄谷良成さん
社会福祉法人 佛子園
理事長

シェア金沢は「ごちゃまぜの町」。一〇年かけて発酵する

編集部=文
text by KOTONONE
岸本 剛=写真
photograph by Tsuyoshi Kishimoto

昨年、『カンブリア宮殿』(テレビ東京系列番組)で紹介されて、シェア金沢への注目はますます高まった。一万坪を超える広さ、門も塀もない敷地、電線もなくすっきりした空、誰もがすがすがしい空気に心を奪われるだろう。だけど、社会福祉法人佛子園の雄谷良成理事長は、「シェア金沢は、まだ発酵していません。発酵してこその町、佛子園はそのための黒子」という。話は、開所八年経った三草二木「西圓寺」からはじまった。

1万1000坪の敷地。電線を地下に埋設して、のびやかな空のもとに、高齢者も障害者もごちゃまぜに暮らす

「ごちゃまぜの町」は、西圓寺にはじまる

「もう一度、七年後のシェア金沢を見てほしい」。

シェア金沢を見学した後に本部を訪ねたら、雄谷さんはそう切り出した。佛子園の狙いとする「ごちゃまぜの町」のカタチはできた。けれど、町は人がつながって発酵する。それには一〇年かかるということらしい。

シェア金沢は、二〇一三年に開所してまだ三年。あと七年すれば、住民がそれぞれの居場所をつくり、思い思いにつながりあって動き出す。それまで裏に回って手を貸すのが、佛子園の仕事。「八年経った西圓寺を見てもらえばわかってもらえるのですが」と、雄谷さんは話をつづけた。シェア金沢は、一万一〇〇〇坪というスケール、美しい町並みに目を奪われて、雄谷さんが意図した本質を見失いやすい。それを懸念した言葉だった。

三草二木「西圓寺」は、居酒屋つきの温泉施設として、二〇〇八年にオープンした。福祉施設としては、異色の商い。しかも、廃寺といえども、地域の人が祈りをささげたお寺なのに。けれど、住民に何度もどんな施設がほしいか、聞いた結果だった。「公民館なんかおもしろくない。みんなが集まれる場所や風呂がほしい」にまとまった。

雄谷さんは大学を卒業して、青年海外協力隊に参加した。赴任先のドミニカで学んだことがある。「お金や技術だけでがんばっても、うまくいかない。われわれが去っても、現地の人が続けてやれるようにしなきゃダメなんです」。大切なことは、現地の住民主体で進めること。西圓寺の開発に当たっても、「自分たちの町なのに、なんで俺らがやるの? 住んでる人がやるべきでしょって」いうスタンスをつらぬいた。福祉施設をやるっていう感覚もない。雄谷さんが住民に示したのは、「障害者や高齢者は勘弁してほしい。アイツと

雄谷良成理事長は熱い思いをデータに基づいてクールに語る